

子牛のペア飼いに よる効果

子牛の管理においては、病気の伝播防止と人への馴致といった観点から個別飼いが基本とされてきました。

しかし、最近、二頭単位で管理するペア飼いが子牛の発育に有効であるとされ、注目されています。

今回は、ペア飼いについて詳しく紹介します。



写真一 ペンによるペア飼いの様子

期待できる効果

○増体が良くなる

以下の理由から、増体が良くなることが期待できます。

① スターター摂取量の増加

同居の子牛の行動を学習することで、スターターを食べることを覚えます。また、競合によりスターターの摂取量が増え、個別飼いの一・五倍になるとのデータもあります (De Paula Vieira et al.2010.J.Dairy Sci.93:3079-3086)。

② グループ化のストレスが軽減

子牛は、新しい環境に遭遇すると底知れぬ恐怖を覚えます。恐怖を感じにくい若齢期からペア飼いを始めることにより、スムーズに群飼いに移行できると考えられます。

主な注意点

○病気の伝播を防ぐ

ペア飼いは子牛同士の接触があるため、病気の伝播が懸念されます。そのため、初乳三L以上を目標に飲ませているか(免疫の確保)、床が汚れていないか(病原菌増殖の抑制)などに注意して取り組みましょう。

事例紹介

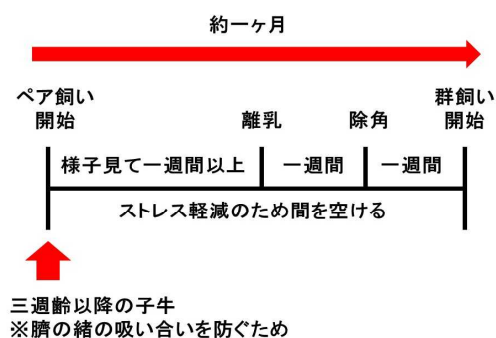
A農場では、ハッチの前についている柵でハッチを繋げて、ペア飼いを実践しています(写真二)。



写真二 ハッチを柵で連結

この農場では、一頭飼いから群飼いへの移行時、グループ化や環境によるストレスで、食欲不振や下痢など、体調を崩す牛が慢性的にいました。そのため、群飼いのストレス軽減と移行時の増体を改善するためにペア飼いを始めました。

ペア飼いの期間は、一ヶ月程度で、図一のとおり、ストレスがかからないような管理をしています。



図一 ペア飼いから群飼いまでの管理 (A農場)

ペア飼いでの外見の明かな増体の違いは見られませんでした。が、育成舎への移動後、体調を崩しにくくなり、鳴く期間も一週間から三日に短縮されたそうです。これは、ペア飼いで他の子牛に慣らすことにより、社会性が身につく、群飼いへの移行ストレスを軽減できたためと考えられます。

農業者の方からは、「ハッチがあればできるので、やってみる価値はある。まだ始まったばかりなので、今後の増体に期待している」との声がありました。

(平成二八年十月執筆)